

台湾の小学校における社会科教育に関する一考察

松原 真沙子

A Perspective on Social Studies in Elementary School in Taiwan

Masako MATSUBARA

50年に及ぶ日本による植民地統治を経験した台湾が、小学校の社会科で日本統治時代をどのように教えているか。また台湾が民主化された現在、日本が去った後に大陸から移ってきた蒋介石の国民党政府による統治をどのように統括し、教えているか。本論文はこの二点を第一の目的とするが、台湾では5年生から始まる社会科の内容を日本の社会科と比較することも試みたい。

はじめに

1987年に戒厳令が解除されるまで、台湾の歴史は不運に満ちている。この戒厳令は、1949年蒋介石の国民党政府によって発布されたものであるから、台湾の人々は、実に38年もの間行動の自由を奪われていたことになる。その後、民主化への模索、闘争を経て、1996年国民選挙によって総統が選出され、李登輝が初代総統に選出されて、台湾は真の民主化への道を歩み始めた。しかしこれで全てが終わったわけではない。台湾の問題はまだ続く。中国大陸との間の関係に決着がついていないからである。現在台湾は、国家としての体をなしているにもかかわらず、国際社会では国とは呼ばれない。台湾地域である。このように地理的にも曖昧な立場にある台湾で、社会科はどのように教えられているのだろうか。

台湾の不運は1554年に始まる。ポルトガル人が商船で台湾沖を通ったとき、島に樹木が青々と茂り、雄大な山がそびえている様子はるかに見えた。誰かが「イラ・フォルモサ」（なんと美しい島だ）と感嘆の声をあげた。それ以後西洋の航海図に「フォルモサ」が地名として使われるようになった。この「フォルモサ」を西洋人がほっておくはずもなく、オランダ人が目をつけ、スペイン人が目をつけた。台湾には勢力割拠の状況が生じ、台南付近はオランダ人、東北海岸はスペイン人、嘉義・雲林一帯はすでに定着していた大陸からの漢人という色分けになった。⁽¹⁾

1894年の日清戦争が、台湾をめぐる環境を一変させた。翌年李鴻章と伊藤博文の間で調印された「下関条約」（中国語では馬関条約）で、台湾は中国によって日本に割譲された。この「下関条約」は、台湾では後代に無限の禍根を残した条約と認識されている。日清戦争

の進行を見守っていたイギリス人の清国海関総税務司ロバート・ハートは、次のような嘆きの言葉を書き残しているという。「中国はいかなる国の怒りをかかったこともなく、どのような過失を犯したわけでもない。かねてから戦争を好まず、犠牲となることをも甘受してきた。中国は病める一老大国にすぎず、太平の数世紀を過ごす間に活力を跡形もなく失ったのである。ゆっくりと蘇生に転じたまさにその時に、小粒ながら精悍で完全武装した日本の餌食になったのである」⁽²⁾

武力によって台湾を領有しようとした日本は至るところで台湾人民の頑強な抵抗に出会った。武装抗日のうち「噍吧年」と「霧社事件」が特筆されるべきものであろう。前者は漢人による最大の抗日革命であり、後者は先住民族による最後にしてかつ最も壮烈な起義であった。⁽³⁾

日本軍によって「全台平定」が宣言されたときから、台湾は、近代化と植民地化の二重の歴史過程を経験することになる。

1 日本と台湾の教科書比較

上記の歴史を踏まえて、日本と台湾の5年生の社会科教科書を比較してみたい。全内容を取り上げるには困難があるので、ここでは目次だけを取り上げることにする。

5年生の社会科教科書の日台目次比較

日本 東京書籍 平成13年	台湾 翰林出版 2007年
上	上
どきどきわくわくたんけん日本列島	一 臺灣在哪裡（台湾はどこにある？）
1 わたしたちの生活と食料生産	1 臺灣在這裡（台湾はここにある）
1 米づくりのさかんな庄内平野	2 臺灣的形成（台湾の成り立ち）
2 水産業のさかんな八戸市	二 臺灣的自然環境（台湾の自然環境）
3 これからの食料生産	1 山海之歌（海山の歌）
2 わたしたちの生活と工業生産	2 生活的泉源（生活の源泉－水問題）
1 自動車を作る工業	3 氣候變奏曲（氣候の変奏曲－風・雨）
2 工業地域と工業生産	三 臺灣的資源（台湾の資源）
3 工業生産をささえる貿易と運輸	1 土地利用與生態環境（土地利用と生態環境）
	2 豊富的物産（豊富な農産物）
	四 人口和聚落變遷（人口の推移）
	1 人口知道多少（世界の人口と人口密度の比較）

- 2 聚落類型與生活差異（各集落の特徴と生活のちがい）
 - 五 臺灣的區域與交通（台湾の4区域—北部，中部，東部，南部）
 - 六 關懷臺灣（台湾に関心をもとう）
 - 1 臺灣的環境災害（台湾の自然災害と環境問題）
 - 2 行動愛臺灣（台湾を愛する行動をしよう）
- 下
- 3 わたしたちの生活と情報
 - 1 放送局の働き
 - 2 情報と社会
 - 4 わたしたちの国土と環境
 - 1 各地のくらしと気候
 - 2 わたしたちの生活と環境
 - 3 わたしたちの生活と自然保護
 - 4 わたしたちの国土
- 一 尋先民足跡（祖先の足跡を尋ねて）
 - 1 認識臺灣的過去（台湾の過去を知ろう）
 - 2 臺灣的史前文化（台湾の古代文化）
 - 3 原住民的世界（原住民の世界）
 - 二 邁入國際舞臺（外国との接触）
 - 1 荷西時期的統治（荷西統治時代）
 - 2 明鄭時期的開發（明の鄭成功時代の開發）
 - 三 移民的新故郷（移民の新たな故郷）
 - 1 唐山過臺灣（唐山が台湾と行き来する）
 - 2 移民的社會（移民の社会）
 - 四 現代化的開端（近代化のはじまり）
 - 1 大船入港（大船の入港）
 - 2 清末的建設（清末の建設）
 - 五 日本統治下的臺灣（日本統治下の台湾）
（目次の翻訳は内容がよりよく伝わるように原文に付け加えるかたちで多少変えてある）

2 「台湾人」としてのアイデンティティの確立

上記に挙げた目次だけを比較してみても、台湾の社会科教育は、「愛国的」そして、その「愛国」を強調するために、社会科にしては多分に「情緒的」な作りになっている。第二次大戦後、台湾の国民教育のカリキュラムは何度かの改革を行ったが、その過程でも国土を愛し、国を愛する心情をもつ市民の育成は、常に社会科教育の主要な目的であった。⁽⁴⁾しかし、その時々々の政治意識や国家の基本政策の影響を受けたばかりでなく、学習時間数の制限を受け、十分

な教育ができなかったため、生徒の台湾に対する知識と理解は極めて不十分であった。したがって、新しい教科書を編纂するにあたって、この地、台湾と、運命共同体の建設を自分自身の問題として認識することの重要性を強調することを主要目標とした。⁽⁵⁾ 日本の指導要領に掲げられた目標が3行で終わっているのに対して、民国92年（2003年）に教育部が公布した「國民中小學九年一貫課程社會學習領域正式綱要」に掲げられている社会科教育の理念は5項目からなる。

- 一 以學生爲主體（生徒を中心とする）
- 二 注重情意和技能的學習（情操と技能学習を重視する）
- 三 生活化與活潑化（生活に根ざし、学習を生き生きとさせる）
- 四 本土化與國際化（国土に根ざすと同時に國際化も重視する）
- 五 多元化與科技化（文化の多元性を尊重する態度を備えつつ、科学技術の技能と素養を涵養する）

3 政治に翻弄される社会科教育

新しい綱要になってからの教科書の特徴は、なんとといっても、地理にしろ、歴史にしろ、台湾中心の内容になっていて、大陸の地理・歴史には触れていないことである。自分たちの国土、台湾を知り、愛する心を育てる作りになっている。しかし中華民国という名称を捨てたわけではない。表記する際には中華民国（在台湾）としている。民進党が政権を取ってから、それまでの国定教科書から、教育部による認定方式に変えられたが、民進党の政治色は明らかに見て取れる。例えば（下）の第6章「光復後的政治發展」（日本の植民地支配から解放されて後の政治發展）の項では、孫文は辛亥革命の英雄として写真入りで紹介されているが、良くも悪くも38年間台湾を支配した蒋介石には一言も触れていない。息子の蔣經國の名前が欄外に38年間の戒嚴令を解除する總統令の説明部分に載っているのみである。蒋介石支配の38年間については、民国38年（1949年）政府は、中国共産党に追われて、首都を台湾に移し、同時に戒嚴令を施行し、人民の言論、集会、結社等の自由に多大な制限を加えたと記されている。⁽⁶⁾

一方1968年に教育部より公布された「國民小學中高年級社會暫行課程標準編輯」によって作られた教科書には、「我們都是中國人……我國領土的面積很大」（私たちは皆中国人である。……私たちの領土は広大である）と書かれており、中国（大陸）とアメリカ、日本、イギリスとの国土の広さを比較する図が載っている。また蒋介石に関しては、孫文に続いて1章を設け、冒頭に学ぶべき問題として（一）總統 蔣公做了那些偉大的事業？（總統，蔣公—公は男性の尊称に使う—はどのような偉大な事業を成し遂げたのか？）（二）總統 蔣公爲甚麼是中華民族的救星？（總統，蔣公はなぜ中華民族の救世主なのか）ここで

は抗日戦争と中国共産党（共匪という言葉を使っている）との戦いが同じ比重で書かれており、台湾で大陸奪還（反攻大陸）の準備をしていると記されている。章末【研究と討論】として（一）奉化縣在我國的那一省？把它從地圖上找出來。（*奉化県は蒋介石の出身地。奉化県は私たちの国のどの省にありますか？地図の上で探してみよう。）（二）搜集總統 蔣公的照片，在教室展覽出來（總統蔣公の写真を集めて，教室に飾ろう）（三）講述總統 蔣公幼年的故事（總統蔣公の幼年時代の逸話を語ろう）（四）閱讀有關總統 蔣公的讀書（總統蔣公に関する本を読もう）の4点があげられている。⁽⁷⁾ 個人崇拜の教育が見て取れる。小学校教師には本省人（*台湾人）もいれば、外省人（*蒋介石とともに大陸から渡ってきた人々）もいる。本省人教師にとっては、これを生徒に教えることは内心忸怩たるものがあつたであろう。

国民党時代にはタブーとされていた二二八事件に関しては1頁を使い、頁の下半分には嘉義市二二八紀念公園の記念碑文の写真が載せられている。二二八事件に関しては下記のような説明がされている。

二二八事件

臺灣光復初期，由於政府施政措施失當，經濟蕭條，語言隔閡，治安惡化等原因，在民國36年爆發「二二八事件」。事件發生後，政府派兵鎮壓，人民死傷慘重，形成一大悲劇，對後來臺灣的政治發展，族群融合等產生不良的影響。

近年來，政府正視這個歷史悲劇，透過道歉，賠償等方式，積極彌補裂痕，在坦誠的面對與彼此包容下，現在臺灣已逐漸走出這個；歷史悲劇的陰影。⁽⁸⁾

（台湾が中華民国に復歸したばかりのころ，政府の政策の失敗，經濟の疲弊，言語の違い，治安の悪化などが原因で，民國36年（1947年）に「二二八事件」が起こった。事件發生後，政府は兵を派遣してこれを鎮圧したため，人民の死傷の被害は甚大となり，一大慘劇となって，その後の台湾の政治發展，民族融和等に悪影響を与えることになった。

近年，政府はこの歴史的悲劇を直視し，謝罪，賠償等を通じて，積極的に亀裂を修復し，誠意をもって向き合い，互いに許しあい，現在台湾は徐々にこの歴史的悲劇の残滓から脱出しはじめている。）

先に述べた蒋介石個人崇拜を教えるのとは逆に，外省人の教師が平静な気持ちで二二事件を教えることは難しいであろう。

4 日本統治時代

国民選挙によって選ばれた初代台湾総統李登輝の母語が日本語で、親日的であることはよく知られている。また彼と同時代に生きた台湾人の多くも親日的で、日本にとってもっとも近いのは台湾であるといってもよいであろう。しかし、若い世代には日本が台湾を植民地として収奪したことは社会の教科書でしっかりと教えられている。例えば小学校5年生社会下の単元五「日本統治時代の台湾」の2『日本の植民統治』には要約すると以下のように記されてされている。

専制的庶民統治

日本は台湾占領後、最高統治機関として台湾総督府を設立し、専制的植民統治を実行した。日本政府は、台湾総督に、行政、立法、司法及び軍事等の大権を与えた。その他、さらに多くの不平等条約を制定し、台湾人民が持つべき権利と自由を剥奪した。例えば、1901年「土地徴用規則」を公布し、広大な台湾の土地を徴収し、これを廉価で日本人に売った。これは土地の略奪である。

日本政府は、抗日勢力鎮圧のため、台湾人の行動を監視し、拘束し、各地に派出所を設け、警察の権力はますます拡大していった。そして警察は地方の大小の事柄に介入し、民衆の日常生活にまで干渉した。例えば、公共集会や裁判所の案件審理を監視した。

民族を差別した待遇

日本が台湾を統治した期間政治は無論のこと、経済、教育上でも台湾人を差別し、日本人と台湾人の待遇は同等ではなかった。政治面では、台湾人はみな低い公務員の地位にしか就けなかった。しかも給与は日本人より低かった。経済面では、大企業はすべて日本人によって経営され、また金になる米、砂糖、樟脳等の交易は、日本人商人或いは台湾総督府が独占していた。大部分の台湾人は労働者になるしかなかった。⁽⁹⁾

台湾統治で成功したとされている教育についても

教育方面、學校分成三類。日本兒童上「小學校」、漢人兒童大都上「公學校」、而原住民兒童上「蕃人公學校」。「公學校」和「蕃人公學校」的師資、設備都比「小學」差、升學更有重重限制與不公平待遇。⁽¹⁰⁾

(教育面では、学校は三種類に分かれていた。日本人兒童は「小學校」に入り、中国人兒童の大部分は(全部とは記されていないことは、例外もあったということ。つまり豪農や豪商の子弟は小學校入学を許された。)
「公學校」に入り、原住民の兒童は「原

住民公学校」に入った。「公学校」と「原住民公学校」の教師の質も設備も「小学校」に比べて劣り、進学には更に種々の制限と不公平な取り扱いがあった。）

と記されていて、評価はされていない。

5 「日本統治時代」の授業参観⁽¹¹⁾

台北市の私立新民小学校と、台北市立光復国民小学校の5年生の授業を参観する機会を得た。台湾の小学校では、担任が教えるのは、算数と国語のみで、社会、理科、英語、音楽、体育、図工は全て専科として、専門の先生に任されている。担任は、日本よりもはるかに厳しい将来の受験を視野に入れて、重要科目である算数と国語に力を入れるところにねらいがあるようである。社会を担当する先生は、全て小学校教諭の資格を持っており、一度退職して、再就職した先生が多い。

社会の授業では微妙に政治が影響している。先に参観した私立新民小学校の女性教師は外省人で、授業は教科書に添って淡々と進められていた。公立の光復国民小学校の女性教師は本省人のためか、台湾人が日本支配に対して勇敢に戦った様子をビデオで見せ、抗日に使われた青地に虎の旗⁽¹²⁾の説明を丁寧にしていた。児童は多少うるさかったが、この旗に興味を示していた。両小学校とも、事実を教え、児童が反日感情もつような教え方をしていなかったのは幸いだった。また台湾は民主化されたとはいえ、大人の心理はそれほど簡単には変わっていないことを、期せずして授業を通して知らされた。

6 公学校卒業生

先に述べた公学校卒業生に会って話しを聞く機会を得た。三つの異なる年齢の方々だったが、それぞれの公学校に対する思い入れの強さに驚かされた。

(1) 「開南一期学縁会」の人々

公学校を卒業して、さらに上の開南商業学校（当時の日本の高等商業にあたる）に進学した同窓生の昼食会に参加させていただいた。当時の台湾人エリートの集団といってよいであろう。彼らの結束は固く、台北在住者は台北で、月一回の昼食会を夫婦同伴で楽しんでいる。この席での言語は日本語と閩南語で、北京語は話されない。こちらが戸惑うほどの親日家の集まりであった。「日本統治時代」のなにがよかったのかの問いにまず挙げられたのは、「なによりも先生がよかった」であった。そして社会の治安がよかったことも挙げられた。先生からは、勉強だけでなく、礼儀、作法、さらには生き方までを学んだという。開南商業学校卒業生の一人は、労務奉公団に徴用されて行ったラバウルで校長から慰問の手紙をもらって、自分がどこにいるのかを知っていてくれたことにいたく感激していた。また戦後には、大阪

病に臥せていた校長を訪ね再会をはたしている。⁽¹³⁾ こういったエピソードからも、彼らがいかに先生を慕い、また教師の側も児童ひとりひとりに心を配っていたかがわかる。

1942年のミッドウェー海戦のころになると、彼らのところにも「労務奉公団」という名目の徴集令がくるようになった。送られた先にもよるのだろうが、差別もされず、残酷な目にも遭わなかったようだ。むしろ彼らは自らを「二等国民」と自覚し、日本人ではないから、本物の戦闘には加わらなくてすむだろうくらいに考えていた。この「二等国民」という言葉も、差別というよりは分類のような受け取り方をしており、姓名も、陳がいつの間にか平田になっていたり、無理やり改名させられたという印象は受けない。⁽¹⁴⁾

(2) 「高座会」の人々

「高座会」の人々は昭和5年生まれで、「開南一期学縁会」の人々よりもほぼ10年若い。公学校を卒業するころには戦況も悪化し、進学はほとんど閉ざされていた。厚木の飛行場で奉仕すれば、5年後には3000元を支払われ、飛行機で台湾に帰郷できるという夢のような話を信じて、8000人余の中学生、公学校卒業生が日本に渡った。厚木では、軍事教育、実習教育と称して、厚木航空隊の工場で働かされた。5年を待たずして終戦となり、2年後には台湾に帰郷している。⁽¹⁵⁾ 勿論当初の約束は何一つ守られなかった。彼らは、「開南一期学縁会」の人々とは異なり、日本人の先生が特によかったという記憶はないという。その後国民党軍の台湾入城を見ることになるのだが、檻樓の国民党軍の有様に失望と軽蔑の念を持った。この世代になると、日本による教育と産業面での発展は認めても、台湾人はせいぜい村長止まりで、政治に参加させないことに不満を抱いていた。したがって、蒋介石を歓迎し、彼によって台湾人の誇りが回復されると期待したが、蒋介石が始めたのは白色テロだった。

(3) 「堵南会」の人々

「堵南会」は旧制台北州立基隆中学校の卒業生全てを含む会である。1945年4月の新入生が、日本統治時代最後である。敗戦が色濃くなったこの時期、空襲が頻繁にあり、勉強はせず、奉仕作業に明け暮れる毎日であったと駱文森氏は記している⁽¹⁶⁾ 1945年の9月から11月の間は、日本人の教師による日本語での教育が続けられた。台北州立基隆中学が、台湾省立基隆中学に改編されたのは12月になってからである。ここで突然国語（北京語）の授業が始まった。誰ひとりとして北京語を解するものではなく、「天翻地覆」を経験し、生徒にとっては右往左往の日々であった。国語の教科書の第一課は「我們都是中國人」（我々は皆中国人である）で始まっている。⁽¹⁷⁾ 台湾における皇民化運動がよく俎上にのぼるが、駱氏の公学校の修了証書の名前は「井口森夫」になっている。理由を尋ねると、強制されたものではなく、日本人の名前の方が「格好がよい」と思って自分で決めたという予想外の返答だった⁽¹⁸⁾ 「開南商業学

縁会」の人々も、「高座会」の人々も、また「堵南会」の人々も、台湾では語る言葉を持つ恵まれたエリート集団である。彼らほど恵まれていなかった台湾の人々が、日本統治をどう見ていたかを知る術はない。

むすびにかえて

中華民国（台湾）の独立を志向する民進党（民主進歩党）が政権を握っている現在、台湾の社会科教科書は、政治、地理、歴史分野全てにおいて、台湾人としてのアイデンティティーを児童がしっかりもつことを目標にしてつくられている。8割が台湾人の台湾で、中国大陸系の国民党から総統が選ばれることはないと駱文森氏は楽観的だったが、万一台湾人のなかで割れて、国民党が政権を取ることになった場合には、児童は中国人としてのアイデンティティーをもつような教育をうけることになる。このようにその時々政治に左右されるだけでなく、台湾人の教師と大陸系の教師が共存しなければならないなかで社会科を教えることの難しさを実感させられた。目次を見ても日本の小学校の教科書は児童を子どもとして扱い、どこか牧歌的な印象さえあるのに対して、台湾の教科書は、アイデンティティーの確立という重い課題を負っているように見受けられる。

註

- (1) 殷允芃, 丸山勝訳, 「台湾の歴史—日台交渉の三百年」, 藤原書店, 2005年, pp.37-38.
- (2) 同上, p.223.
- (3) 周婉窈, 「図説—台湾の歴史」, 平凡社, 2007年, pp.105-106.
- (4) 日本の社会科の目標は「社会生活についての理解を図り, 我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て, 国際社会に生きる民主的, 平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とある。『学習指導要領解説 社会編』, 平成11年文部省, p.11.
- (5) 「社会 5上 教学指引」, 翰林出版, p.5.
- (6) 国民小学社会 5下, pp.88-89.
- (7) 国民小学社会课本第一册, p.3, p.6, p.15, p.18.
- (8) 国民小学社会 5下, p.8
- (9) 原文は, 国民小学 5下, pp.72-74.
- (10) 同上, p.75.
- (11) Appendix の写真参照。
- (12) Appendix の写真参照。
- (13) 陳徳富著, 「台湾労働奉公団ラバールたより」, 2002年, 自費出版.pp.33-34.

陳徳富は、開南商業学校を卒業後、「産業闘士という美しい名目で」台湾貯蓄銀行に就職した。しかし1942年6月5日のミッドウェー海戦後、労務奉公団の徴集令を受けて、ラバウルに送られた。

(14) 同上, p.36.

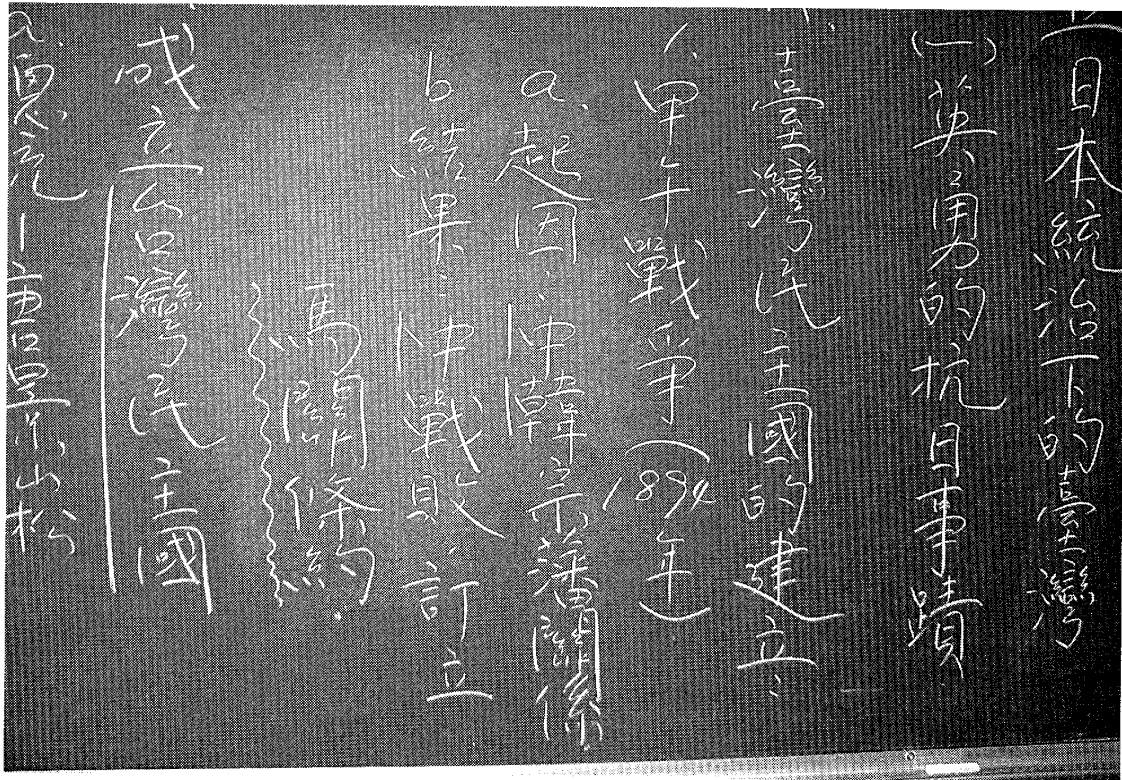
(15) 日本に渡った生徒の一人、陳俊義氏は「回顧留日60年贈送給親朋友紀念專輯」と題するCDの私家版を作って、友人などに贈っているが、冒頭彼は次のようなナレーションを入れている。

『六十年前，一九四五年太平洋战争使日本陷入焦灼状态，节节败退的局势，为此日本海军为打开僵局补充人力来制造特攻部队，到台湾招募了八千四百多个小学及中学的精英毕业生，并分批运送到日本本土，当时太平洋上日本军已丧失了制海权，美国的舰艇随时都可能出来攻击日本的运输船，我们就是在这种局势中搭上了日本的运输船在海上漂流了十多天才平安到达了日本本土。这一首「暁に祈る」就是当时我们在船上日夜穿着救生衣为了壮胆和消遣日子所唱的军歌。当年我才十四岁，现在回想所唱的「暁に祈る」真是令人感慨万千。它虽然有雄壮的节奏，但却也言诉不了无奈的悲情歌词。我现在从唱它对六十年前那一段，有无限的怀念。它是我踏进不平凡人生第一首意义深刻的歌。』
 (60年前，1945年太平洋戦争で，日本はどうにもならない状態に陥り，各地で敗退している情勢だった。日本軍は追い詰められた局面を打開人を補充し，特攻隊をつくり，台湾で8,400人余の小学校および中学校卒業生を募集して，分けて日本本土に輸送した。当時太平洋上での制海権をすでに失い，アメリカ艦隊はいつでも日本の輸送船を攻撃することができた。我々はこのような情勢のなか，日本の輸送船に乗り，海上を漂流すること十数日でやっとなら日本本土に上陸した。この「暁に祈る」こそ，当時我々が戦場で日夜救命胴衣を着けたまま，勇気を振るいおこし，また時間つぶしに歌った軍歌である。当時私は14歳で，その時に歌った「暁に祈る」を思い出すと，万感胸に迫るものがある。「暁に祈る」は勇壮なメロディーだが，言葉では表現できない悲しみを秘めた歌詞である。私は今「暁に祈る」歌うと，60年前のあのころの懐かしさが込み上げてくる。私が平坦ではない人生の第一歩を踏み出した時の，最初の意味を持つ歌である。(聞き取り：敬愛大学国際学部1年 楊効 訳：松原)

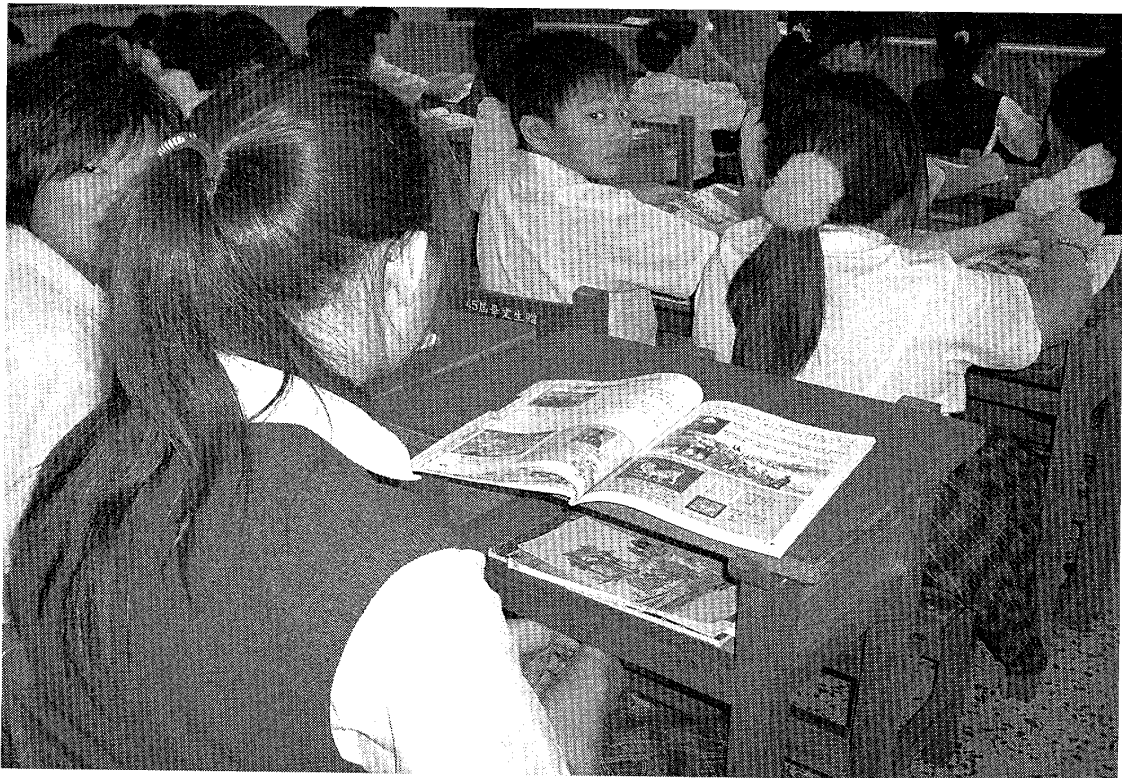
(16) 駱文森「我的『基中』回憶一天翻地覆的年(時)代」,「堵南會報」p.41(号不明)

(17) 同上.

(18) 駱氏の聞き取りから。(2007年5月6日) Appendixの写真参照.



(1) 台北市私立新民小学校 5年生 社会科授業の板書



(2) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景



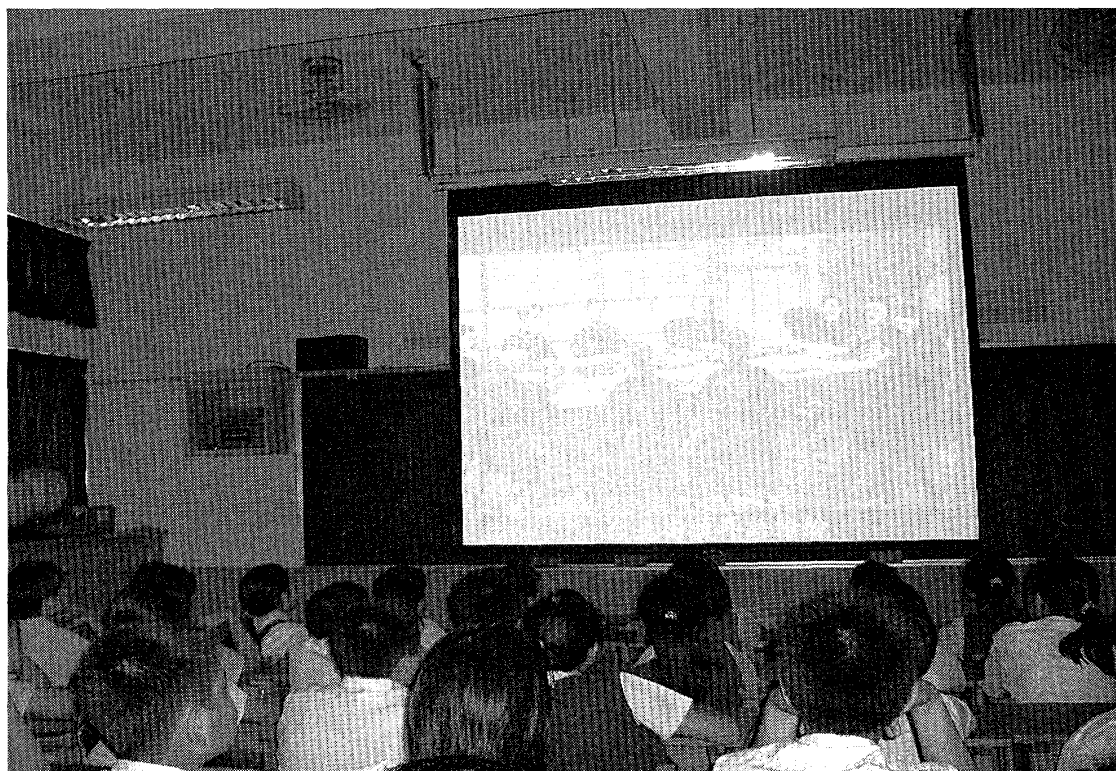
(3) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景



(4) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景



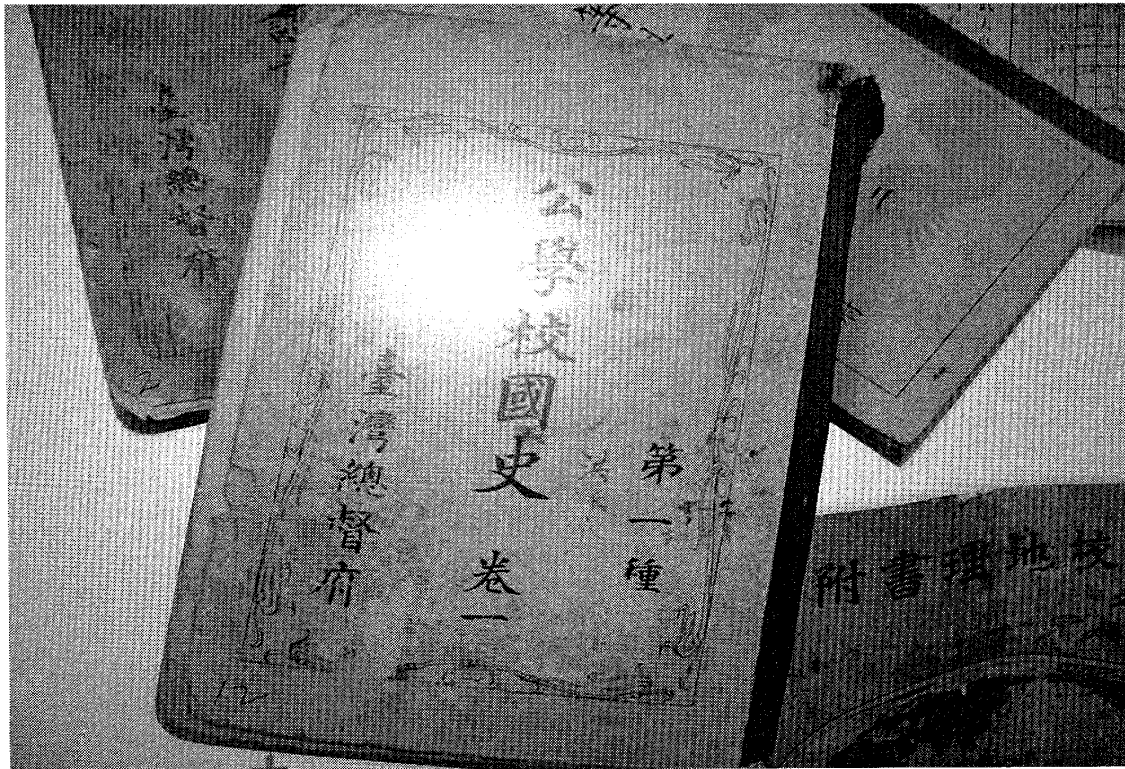
(5) 台北市立光復小学校 5年生 社会科の授業風景



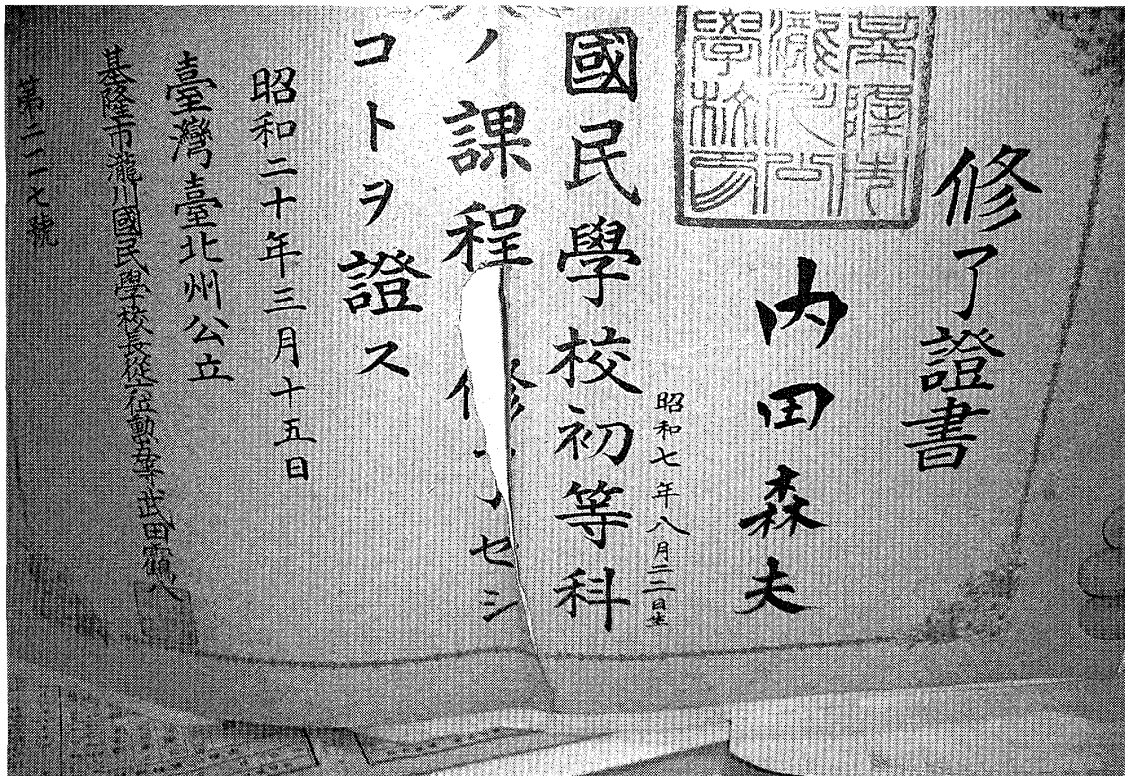
(6) 台北市立光復小学校 5年生 社会科の授業風景「馬関条約」締結のビデオを見る



(7) 日本統治時代「公学校」の教科書



(8) 日本統治時代「公学校」歴史教科書



(11) 羅文森氏の「公学校」の修了証書 名前は内田森夫と日本名になっている



(12) 「開南学縁会」の陳徳富氏の自費出版本「台湾勞務奉公団ラバールたより」



(13) 「高座会」陳 俊義氏夫妻の私家版CD 曲目は軍歌と日本の演歌である



(14) 台湾の小学校5年生の社会科教科書

Appendix

- (1) 台北市私立新民小学校 5年生 社会科授業の板書
- (2) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景
- (3) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景
- (4) 新民小学校 5年生 社会科の授業風景
- (5) 台北市立光復小学校 5年生 社会科の授業風景
- (6) 台北市立光復小学校 5年生 社会科の授業風景 「馬関条約」締結のビデオを見る
- (7) 日本統治時代 「公学校」の教科書
- (8) 日本統治時代 「公学校」歴史教科書
- (9) 羅 文森氏の「公学校」の成績証
- (10) 羅 文森氏の「公学校」の成績証 全優である
- (11) 羅 文森氏の「公学校」の修了証書 名前は内田森夫と日本名になっている
- (12) 「開南学縁会」の陳 徳富氏の自費出版本「台湾労務奉公団ラバールたより」
- (13) 「高座会」陳 俊義氏夫妻の私家版 CD 曲目は軍歌と日本の演歌である
- (14) 台湾の小学校5年生の社会科教科書